

日本文学概論

改訂版

文学博士

麻 生 磯 次

秀 英 出 版

日本文学概論 改訂版

昭和43年3月30日 初版発行

定価 1800円

昭和61年4月10日 改訂6版発行

	麻 生 磯 次
著作者	松 田 武 夫
	市 古 貞 次
発行者	株式会社 秀英出版
	代表者 金森良之
整 版	有限会社 西田整版所
印 刷	株式会社 秀 英 社

発行所 株式会社 秀 英 出 版

〒162 東京都新宿区納戸町40

振替東京2-119739・電話(260)5281

©麻生磯次 1968

1091-21023-3042

製本・河上製本

は し が き

日本文学とは何か——ということを説明する方法に、日本文学史と日本文学概論（国文学概論）があります。日本文学史は、日本文学全体を歴史的展開の軌道の上に、主として、作品・作者・種類・思潮などを乗せながら説明するもので、日本文学の全貌を理解する有力な一つの方法であります。それと並行し、密接に関係しないながら、文学的体系のもとに日本文学を説明するものに、「日本文学概論」があります。

例えば、日本文学と称しながら、どの範囲までの文献を日本文学と認めるか。あるいは、日本文学にはどんな種類が存しているか。また、日本文学が内包する文学理念には、どんなものがあるか。さらにまた、日本文学と風土との関係はどうなっているか。すべて文学は時代と社会の所産なので、日本文学は、日本の時代・社会とどんなつながりがあるか——といった観点から日本文学を認識することも、日本文学に対する見方・考え方の一つ一つであります。

文学には、必ずその発生と展開が存在しますが、日本文学の発生と展開はどうであるか。したがって日本文学を、韻文・散文・劇文学に三分し、それぞれの発生と展開はどうなっているかを明らかにするの、これまた、日本文学の本質を知る方法であります。

以上は、日本文学自体の有する、静的でかつまた動的な二面性ではありますが、こうした客観的存在としての日本文学を、受容し研究する第三者的な立場から、いろいろな方法によって研究がなされています。作品と作者と受容者の一体的関係は、文学の有する属性でありますから、研究法を概観することも、日本文学を間接的

に理解することであり、ひいては自分の研究法の樹立にも役立つことになるのであります。

これらの諸観点から、日本文学を觀察説明することは、文学史的体系以外の概論的体系によらなければなりません。

本書においては、内外の文学概論を参考にしながら、かつまた教壇上の経験と思索の上に立ち、大学用教科書として、最も妥当な体系を立て、必要な項目を重点的に取り上げ、最新の学説をも盛り込み、実際の講義に際し、教授者も学生も共に取扱いやすいよう、内容分量なども勘案して要を得ることを旨としました。

また、本書で概説した日本文学への知識は、一般の人々が、教養として当然所持すべきものだとも思います。

昭和四十三年三月

麻 生 磯 次

松 田 武 夫

市 古 貞 次

目次

序説	一
----	---

第一章 日本文学の性質	四
-------------	---

一 日本文学の領域	四
-----------	---

領域の横への拡大	五
領域の縦への拡大	八
絵詞への拡大	六
沖縄文学への拡大	七

二 日本文学の種類	九
-----------	---

韻文学	九	和歌	九	連歌	一〇
俳諧	二	狂歌	二	川柳	二
近代詩	二	歌謡	二	散文文学	三
神話	四	祝詞	五	宣命	五
物語文学	五	歌物語	六	作り物語	六
御伽草子	六	仮名草子	七	浮世草子	七
読本	七	草双紙	七	洒落本・滑稽本・人情本	八

明治以後の小説……………	一六	歴史物語……………	一九	軍記物語……………	一九
英雄伝記物語……………	二〇	説話文学……………	二〇	日記文学……………	二一
紀行文学……………	二三	随筆文学……………	二三	評論文学……………	二三
法 語……………	二三	漢文学……………	二三	劇文学……………	二四
結 語……………	二五				

三 日本文学の理念

清 明……………	二六	直 剛……………	二七	和……………	二七
たわやめぶり……………	二六	あはれ……………	二六	をかし……………	二三
つれづれ……………	二七	徒然草におけるつれづれ……………	二四	無 常……………	二四
西行における無常……………	二五	鴨長明の無常観……………	二五	平家物語の無常……………	二六
幽 玄……………	二六	連歌の幽玄……………	二六	能の幽玄……………	二六
妖 艶……………	二六	有 心……………	二六	風 雅……………	二〇
わ び……………	二二	さ び……………	二三	滑 稽……………	二四
粹・通・意気……………	二五				

四 日本文学と風土

日本の国土と文学……………	二六	古代文学と風土……………	二七	四季的観念の確立……………	二七
四季と古典文学……………	二六	四季と年中行事……………	二六	四季自然の日本文学への影響……………	二六

五

日本文学と時代・社会

六三

連歌・俳諧と季節…………… 四九

四季と歌謡…………… 五二

琉歌における四季…………… 五二

地理的条件と文学…………… 五三

山間文学…………… 五五

京都と平安文学…………… 五五

水辺文学…………… 五五

歌 枕…………… 五五

地理的位置…………… 五七

景勝・信仰・伝説的背景…………… 五六

掛詞的地名…………… 五六

季節の自然と土地…………… 五九

各種文学の必要とする土地…………… 五九

近代文学と風土…………… 六〇

日本文学の古代…………… 六三

琉球文学の古代…………… 六三

推古期から天平期…………… 六三

中古の黎明期…………… 六四

貞観期と摂関政治…………… 六四

藤原基経と古今集…………… 六七

摂関政治と女流文学の興隆…………… 六六

院政の開始と文学の革新…………… 六六

摂関政治の崩壊と文学の衰微…………… 六九

平安時代美術と文学…………… 六九

中古文学から中世文学への移行…………… 七〇

和歌文学の完成…………… 七三

封建社会と仏法…………… 七二

王朝文学の残照…………… 七三

軍記物語の盛衰…………… 七五

和歌の伝統とその衰微…………… 七三

連歌の新興と衰亡…………… 七五

中世思想の基盤…………… 七六

仏法の弘布と説話文学・絵巻の興隆…………… 七四

琉球の組踊…………… 七六

中世末期と御伽草子…………… 七八

足利將軍の嗜好と芸能の発達…………… 七六

近世期の開始…………… 七九

町人の勃興と町人文学の盛況…………… 八二

南蛮人の渡来と切支丹文学…………… 七九

町人文学への圧迫…………… 八二

笑による精神の解放…………… 八二

華麗な町人文化…………… 八二

儒仏に対する国学の勃興…………… 八三

文人墨客の発生…………… 八三

近世文学の顔貌…………… 八三

過渡期の啓蒙文学…………… 八四

近代文学の黎明期…………… 八四

近代の開幕…………… 八四

過渡期の啓蒙文学…………… 八四

近代文学の黎明期…………… 八四

近代文学の開花期	六六	近代詩歌の出発と改革期	六六	近代文学の定着期	六七
大正文学の進展	六八	関東大震災以後の文学	六九	日本文学と時代・社会	七〇

第二章 日本文学の展開

一 日本文学の発生

上代文学の形態	七五	口承文学	七五	発生の動機	七五
発生の場	七六	発生時の文学の母胎	七六	発生時の形態	七〇
発生の時期	一〇三	記載文学への展開	一〇三		

二 韻文文学の展開

和歌	一〇六	上代の和歌	一〇六	中古の和歌	一〇七
中世の和歌	一〇九	近世の和歌	一一二	近代の短歌	一一三
連歌	一一四	俳諧	一一六	近世の俳諧	一一七
明治以後の俳諧	一二八	狂歌	一二九	川柳	一二〇
漢詩	一三三	近代詩	一三三	歌謡	一二五

三 散文文学の展開

上代	一三七	中古	一三六	中世	一三八
----	-----	----	-----	----	-----

四 劇文学の展開

近世	三九	近世	三九	祝詞・宣命	三九
神話・伝説・説話	一三〇	歌物語	一三三	作り物語	一三三
擬古物語	一三五	御伽草子	一三五	仮名草子	一三六
浮世草子	一三七	読本	一三七	草双紙	一三八
洒落本	一三九	滑稽本	一三九	人情本	一四〇
歴史物語	一四〇	軍記物語	一四二	英雄伝説物語	一四三
説話文学	一四三	日記文学	一四四	紀行文学	一四六
近世の日記紀行	一四六	随筆文学	一四六	評論文学	一四八
歌論	一四八	物語批評	一五〇	連歌論・俳論	一五〇
世阿弥の演劇論	一五一	近松の演劇論	一五二	法語	一五三
漢文学	一五三	啓蒙期の文学	一五四	写実主義	一五五
擬古典主義	一五五	社会派	一五六	浪漫主義	一五六
自然主義	一五八	反自然主義	一五七	プロレタリア文学	一五九
新感覚派	一六〇	新興芸術派	一六〇	新心理派	一六〇
旧作家の動向	一六〇	昭和十年代の文学	一六一	戦後文学	一六一
劇文学以前	一六三	延年・田楽	一六五	能と謡曲	一六七
狂言	一七〇	幸若舞曲	一七一	浄瑠璃	一七三

歌舞伎……………	一四	新歌舞伎……………	一七	新派……………	一七
新劇……………	一六				

第三章 日本文学の研究……………

一 態度と方法……………

文学研究の態度……………	一八	明治時代以後の文献学……………	一三
文献批判に出發した創造的な研究……………	一四	精神史的研究……………	一五
風土的研究……………	一六	芸術的研究と心理学的研究……………	一六
文学の再吟味……………	一七	注釈と鑑賞批評……………	一八
新しい研究とその欠点……………	一八	研究法の混乱……………	一九
研究法は生み出すもの……………	一九	文学史的研究……………	二三
文学的構造の研究……………	二三	文学の小天地……………	二四
文学研究の課題……………	二五		

二 注釈的研究……………

注釈的研究の必要性……………	二五	源氏物語の注釈的研究の展望……………	二七	注釈的研究の実態……………	二九
----------------	----	--------------------	----	---------------	----

三 文学的研究……………

四 文学史的研究

芳賀矢一の文献学……………	二〇〇	現在の文献学……………	二〇二	書誌学……………	二〇三
文献の種類……………	二〇三	文献の形態……………	二〇三	卷子本……………	二〇三
冊子本……………	二〇五	形……………	二〇六	紙質……………	二〇七
筆跡・書体・書風……………	二〇七	写本と板本……………	二〇八	書写区分……………	二〇八
本文批評……………	二〇九	本文異同の原因……………	二一〇	発生過程における異同……………	二一一
伝承過程における異同……………	二一一	校訂……………	二二三	系統……………	二二三
校本……………	二二三	定本……………	二二四	定本作成の方法……………	二二四

二二五

五 文芸学的研究

文学史の三種類……………	二二五	文学史研究の初期……………	二二五	全史的文学史……………	二二七
全史的文学史の発達……………	二二九	種類別文学史……………	二三三	評論史……………	二三三
和歌史……………	二三三	連俳史・演劇史・小説史……………	二三四	演劇史……………	二三五
小説史……………	二三五	時代別文学史……………	二三六	これからの日本文学史……………	二三七

二三八

文芸学以前の諸研究…………… 二三八

文芸学の提唱…………… 二三九

岡崎義恵の日本文芸学…………… 二四〇

六 歴史社会学的研究

歴史社会学的研究の主張…………… 二三三

考証学的研究との関係…………… 二三三

歴史社会学的研究のあり方…………… 二三三

七 民俗学的研究	二二三
民俗学の輸入	二二三
日本文学の民俗学的方法	二三四
沖縄と民俗学的研究	二三四
日本文学研究の多様性	二三五
研究文献	二三七
日本文学年表	二四三
索引	二五四

序 説

日本文学概論は、日本文学とはいかなるものであるかを、概括論述する学問的体系である。したがって、日本文学をどう思考し、どういう角度でとらえるかによって、その体系なり叙述なりの多様性が生じてくる。

本書においては、普遍的妥当的な見解をとることによって自然に得られる体系なり記述なりが、そのまま本書の個性となるよう考慮された。そのため、本書では、「日本文学の性質」「日本文学の展開」「日本文学の研究」の三章を設け、その一つ一つを、さらに、それぞれの細目のもとで略述する仕組みによって、日本文学全体を、概観するようにした。

日本文学を、靜的に觀察すると、まず、日本文学と称せられるものの中には、おのずから限界があり、どのあたりまでを日本文学として認めてよいかという日本文学の領域設定の問題が存している。それを決定する基準は、作品の形式的内容的価値に主として求められる。

日本文学には、さまざまな種類（ジャンル）が存している。それらは、いかなる様相を呈しているであろうか。そうした理解も、日本文学自体を知るためには必要である。

さまざまな種類の文学の内部には、いろいろな文学理念が内在しているが、それらはどういふものであろうか。そうした指摘も、日本文学の性質を知る上に、欠かせてならぬことである。

また、日本文学は、南北に細長く連なる日本列島上に生れたものであるから、その自然と風土との関係をも有している。同時に、日本文学は、日本の風土上に生活した人々の手によって創作されたものであるから、作

者が生きていた時代と社会に、無関係ではない。

このように、日本文学は、作品の有する文学的な性質の価値判断により、その領域内に取り入れられたものが、それと認められ、多様な種類を備え、各種の文学理念を内在させ、日本の風土と、時代と社会との相関において存在し続けたものである。

日本文学のとらえ方は、以上のように、静的な状態において観察するだけでは、満足したものとはいえない。文学は、時間と、それを作製した人間とその社会が、進歩発展するのに歩調を合わせ、発生し、展開し続けるものであるから、その性質のまにまに、発生と展開の動的な相として認識する必要が生じてくる。こうした日本文学の考察は、日本文学史によって果たされているともいえるが、現在の日本文学史は、中世以前は主として作品を中心としてその解説がなされたものであり、近世期における説明は作家を中心とし、近代文学の解説の際には、文芸思潮を基底にしている、全体としては、やや一貫性に欠けるものがある。また、記述の仕方は平叙的で、日本文学の流動性を描くに乏しいものとなっている。

本書においては、日本文学の発生を問題として取り上げ、日本文学を、抒情・叙事・小説 韻文学・散文文学・劇文学に三分し、それらの各々が、いかに発展流動して止まなかったかを明瞭にし、一方では、日本文学の流動的姿勢の把握を期すると共に、他方では、日本文学史の不足を補なわんとするものである。

日本文学は、このような内面的な性質と発展性とを有しているが、これを客観視し、研究対象として、研究者は、種々の方法でその解明に努力している。すなわち、日本文学は、研究するに足る対象としての価値を有するが故に、さまざまな研究者の手によって、思い思いの方法で、解剖され、批判され、理解されようとするのである。そうした研究結果の総合により、日本文学の全貌が、しだいに明確さを増してくるようになった。

日本文学の研究は、研究者が日本文学に働きかけることによって生ずるものである。いにしえから今日まで、幾多の研究者が種々さまざまな研究方法によって、日本文学を研究しているが、日本文学の研究法は、唯一の方法に限られるものではない。ことに今世紀にはいり西欧的な近代化された研究法が輸入されてからは、あるいは自然科学的に、あるいは精神科学的に研究され、日本文学の研究も急速の発展を遂げた。これら諸般の事情を説明することは、研究の対象とされた日本文学を、間接的に解明することになるのである。

第一章 日本文学の性質

一 日本文学の領域

日本文学と称されるものを、実際の作品に即して考えてみると、いろいろ問題が存している。

日本文学を、古典文学と近代文学とに大別することは、今日の常識であり、日本古典文学、あるいは近代日本文学と銘うった叢書・全集のたぐいが出版されている。また、国文学史中に採択された作品、あるいは、国文学の研究者が研究対象に選んだ作品、教科書などに採択された作品その他を見ると、日本文学と見られている作品は、数量的にも、その広がりにおいても、多量で広範囲にわたっている。こうした今日の日本文学といわれるものへの認識は、日本人の日本語による文学的創作表現に、日本人の日本語による外国文学の翻案・翻訳の一部までを加え、さらに、従来は、日本文学の周辺のものと考えられていたものを、日本文学の領域内に編入したためである。すなわち、日本文学の領域は、従来存在した作品を再評価した結果と、新しい作品の出現とによって、横に拡大される性質を持っている。それと同時に、これまでは日本文学の領域内のものとして取扱われなかった作品が、時間の経過にともない、その範囲内に組込まれていくという縦の方向へも広がる性質をも有している。

日本文学というと、古代から今日までの日本の文学すべてを意味するが、日本文学研究の立場からすると、